

2016年10月23日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉師

聖書：創世記3：20-24

タイトル：「御父の思い」

愛する我が子が、犯罪を犯し死刑となる。その時、産みの親はどんな気持ちで我が子を見守るのか…。創世記3章20-24には、そんな「御父の思い」が隠されているように思う。3つのことを考え、また確認したい。

①「いのちの祝福の継承」

創世記1章：神が天地万物を創造された。

その世界は、「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。夕があり、朝があった。第六日（創1：31）」と、まさに完璧で素晴らしい世界であった。また、この創造の御業におけるクライマックスとして、神は「人間」を創造された。

創1：26-27「神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女に彼らを創造された。」

神は、人を神の形として、また神に似せて創造した。それは人間が神のような秩序と、三位一体の神のような互いに一致した交わりを持ち、この世界を適切に統治していけるようにということである。それだけでなく、人間は神御自身との親密で豊かな交わりをする者として、神は人を神の形として、また神に似せて創造してくださったのである。

さらに、創1：28-29には、「神は彼ら（人間）を祝福」してくださったとある。「新たな命の誕生」ということを通し、ますます神の創造された豊かな世界が広がっていくためであり、そのために食物をも、神は備えてくださったのである。神による人への親密で豊かな恵みと祝福、愛が溢れている世界がそこにあった。

もはや足りないものは一つも無い。まさに完璧な世界があった。これ以上はないという素晴らしい世界だった。

神は一つ一つ、一日一日を、大切に、そして愛情と憐れみと恵みをもってご計画の内に素晴らしい世界を創造された。

しかし、これほどまでに素晴らしい完璧な世界であったのに、アダムとエバ（私たち人間と言ってもいいと思いますが）は、神の前に罪を犯してしまった。

この時、アダムとエバが罪を犯すに至った最大の原因は、人の「欲」である。ヤコブ1：14-15にはこのように記されている。

「人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。」

創世記3章でエバが蛇に誘惑されたのは、まさしくこの人の「欲」であった。「目に慕わしく、好ましかった」創3：6のである。

アダムとエバ（人）は、自らの「欲」に引かれ、おびき寄せられ、サタンの誘惑のなかに入り、罪を犯し死ぬ者へとなってしまった。

逆を言えば、人が罪を犯さないようになるためには、この「欲」の部分をごりだけ手放せるか。ということが言える。

そのためには、自分の「欲」の部分をしっかりとして自己認識しているということが必要である。アダムとエバには、もしかするとこの自己認識の部分が欠けていたのかもしれない。

自分は「この部分・あの部分」は本当に弱いと認識し、そして心のどこかにはいつもそういった「欲」の部分があるということ、人間は決して完璧ではなく未熟で、神の助け無しにはとても生きられないという謙虚さが絶えず必要である。

神を「知っている」ということと、神と「共に生きる」ということは全く違う。私たちは日々の生活の中で、何か行動を起こすときに、『自分は本当に神のことばに聴き従っているか?』、またはその行いが、『神の栄光を純粹にあらわすことになるのだろうか?』あるいは『自分ひとりの栄光であって、周りの人々のことを本当に考えているのだろうか?』と、絶えず神のことばと信仰に照らしあわせ、自己の「欲」について自問自答する者でありたい。

アダムとエバは、いつの間にか、神は「知っている」が、神と「共に歩む」ということが欠けてしまっていたのである。

さて、自らの欲により罪を犯したアダムとエバは、「それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ」創2：17と記されているように、神は躊躇なく、すぐにでも罪を犯した彼らを死刑に処しても良かったはずである。けれども、神はすぐにそうはなさらなかった。

代わりに創3：14から、人間の罪に対する神の裁きの宣告がなされた。女性に対しては16節。

神は女に、罪の結果として、命の誕生の祝福が、死を味わうような肉体的な苦痛を伴って産まなければならなくなったこと、さらに夫に支配されるという精神的な面でも悩みの中置かれた。その最後は、自らの罪の結果である「死」が待ち受けていた。

アダムに対しても、責任転嫁した彼への容赦のない罪状が告げられ、土地を耕しても耕してもいばらとアザミが生え、決して終わることのない重く苦しい土地ののろ、労働ののろい、その最後は死であった。アダムは、これら一連の出来事の中に居て、神の裁きの宣告を聞いていた。どれほど大きな悔い改めの思いになっただろうか。

またこの時の彼らの姿は、恥ずかしくも、わずかなイチジクの葉を綴り合わせたもので、自らを隠しながら、そして神の裁きの宣告を聴いていたのである。創3：7

けれどもアダムは、神が告げられた裁きであっても、あの創1：28で語られた、「彼ら(人間)を祝福し、・・生めよ増えよ」との「新しい命の誕生」の恵みとその祝福は変わらずに継承されているということを彼は知ったのである。それゆえに、アダムは、自分の妻の名を「エバ」とはじめて呼んだのである。このエバとは、直訳的には「いのち」という意味である。

さらにアダムはこの妻の名を「エバ・いのち」呼んだ理由を、3：20の後半で語っている。

この「すべて生きているものの母」とは、別の言い方が出来る。

「生きている」とは、「流れる、新鮮な、生き生きした、はつらつした、再生、共同体、リバイバル」といった多くの意味を含んでいる。そして「母」という言葉は、おもしろいが「出発点あるいは分岐点」という意味もある。

つまり「すべて生きているものの母」とは、言い換えれば、「すべての流れの出発点」だからということ、あるいは「すべての生きているものの分岐点」となったからということ、または「すべてのリバイバルの出発点」なんだということ、さらには「すべて(ここから新しい)共同体(として)の出発点」になる。

などと言い換えることができる。それがこの「すべて生きているものの母」ということである。アダムは、神の裁きも聞いて、さらにこれらのことを意味し、妻の名を「エバ・いのち」と呼んだのである。

確かにアダムは神の裁きの宣告を聞き、自らの罪の大きさに唇をかみしめていただろう。「後悔先に立たず」とは言うが、確かにこの時はすでに遅かった。

けれども、人は罪と裁きの中に置かれながらもなお、それで終わりではなく、その中でも神(の祝福)を知り、体験する「いのちの祝福の継承」が今もなお与えられているのである。変わらない神の恵みと祝福を私達はこのアダムが妻を「エバ・いのち」と名付けたその名前の中に見出すことができるのである。

②神のあわれみである皮の衣

創世記3：21

アダムとエバは善悪の知識の木の実を食べ、目が開かれた。それにより、本来は知る必要のなかったことを知るようになった。自らが裸であることを発見し、そしてそれを隠すために、彼らはイチジクの葉の綴りあわせて腰の覆いをつくったのである。

いうなれば、この腰の覆いとは、彼らの罪の結果によって造らなければならなくなった「負の産物」である。

・

彼らは、神ではなく、自らが悪いと思えるものを覆い隠して生活しなければならなくなった。そうしなければ、罪や悪が目飛び込んできて、安心して自分たちの生活をするのが難しくなったのである。

だから、彼らはこの悪であり、罪であり、恥ずかしいと思っている自らの部分を隠したのである。

神は、そこに神ご自身で、皮の衣を作り、彼らに着せてくださったのである。神がアダムとエバの現状を見て、彼らの求めに応じてくださったと言える。

この「皮」とは、「動物の皮」のことである。そして「衣」とは直訳では「長服」である。それはアロンをはじめ祭司たちが後に着る「長服」と同じ言葉である。

神は彼らのために「長服」になるほどの「動物の皮」を用意し着せてくださったのである。

当然考えられるのは、そこには動物のいのちの犠牲があったという事が考えられる。ある注解者は、ここに「贖い」がなされた。と記しているが、ここでは「命の犠牲があった。」とは記されてはいない。それゆえ、もしかすると神は皮の衣だけを特別に彼らに用意してくださった。とも考えることができる。

実際、聖書を読んでいくと、突然神が用意してくださるものが時々ある。例えば、主の使い・御使いもそうである。また創14：18「シャレムの王メルキゼデク」もそうである。この方は系図もなく、出生の記録もなく、ただ神によって立てられた永遠の大祭司として記されている。このように聖書には驚くべき神の御手と御業の中で、神ご自身が特別に備えてくださるものというものがある。そしてそれは、実に特別なものであり、それが人々に与えられる時には、それがどこから来て、どのようにして自分たちに与えられたのか理解している者はいない(イエス以外)。けれども、人はそれが神からのものであると、納得し、知る者は多くいる。

アダムもエバもこのとき、この皮の衣がいったいどのようにして自分たちに与えられたのか、その詳細は分からなかったかもしれない。けれども彼らはそれが神から与えられたモノであるということは確かに理解していただろう。彼らが「皮の衣」を見るたびに、神の存在を知り、そして自分の罪の結果を覆ってくださるあわれみ深い神を、彼らは確かに感じていただろう。

しかし、御父である神からすれば、実に複雑な心境だったに違いない。

なぜなら、あれほどまでに素晴らしい世界を創造されて、そして人に対しては、これ以上ない祝福を与えてくださったのだが、その人間と言え、罪を犯し死の定めの中に入ってしまった。神は祝福を与えたはずが、人は死にゆく者になり、そして神が皮の衣を作り、彼らに着せてあげなければならなくなってしまったのである。この「皮の衣」の出来事の裏には、神の深い悲しみの涙が隠されていたのではないだろうか。

今日、私達には、このアダムとエバの時のような一時的な「皮の衣」ではない、完全に罪を覆い隠し、神の聖さを現してくださる「イエス・キリストという衣」が与えられています。それこそがまさに「神のあわれみの衣」である。神は、この「キリストの衣」を私達人間に十字架による命の犠牲を通して与えてくださった。ひとり子をささげなければならぬほどに人を愛された父なる神の悲しみと苦しみとはいかほどであったろうか……。

その悲しみ苦しみを凌いで神は私達人間を愛し、祝福し、今もキリストの衣を与えてくださっていることに何よりも感謝したい。

アダムとエバは、彼らに与えられた「皮の衣」を見る時に、神のあわれみが溢れていたのである。

③神の主権とその裁き

最後の22-24までは、非常に厳しいことが記されている。

アダムとエバは、善悪の知識の木の実を食べたことにより、神から善悪を教わるのではなく、自分たちで事のよし悪しを判断するようになった。それゆえ、今度はいのちの木からも取って食べて、自ら犯した罪を自己清算、自己解決する危険性があった。

22で「彼が手を伸ばし」という言葉は、「人間が権力を広げる」という意味がある。また「取って食べ」という言葉も、人間が「自分で取る」という意味がある。これらはあたかも、人間は神に造られた特別な存在なのだから、その権利を当然主張してよいのだと、云わんとするような含みが隠されてある。

しかし神は、そうした人間の権利をことごとく神の主権をもって裁かれた。それが23-24である。神は、人をエデンの園から追い出した。24では追放という言葉が使われている。神は「追い出す、追放」という非常に強い言葉を2度も使い、人を追い払われた。それが、人間が神に創られたときに、原料となった「土地のチリ」のところである。

神は人に対し、『あなたが取られたのは、その土地のチリからであって、あなたは自分の権利を広げて、いのちの木の実を自分で取ることはできない、自分で取るのではなく、あなたは神である私に取られた存在なのだ!』ということを、神はここで断言している。

また人が自分の権力を広げていのちの木の実を取ることが絶対にできないように、いのちの木への道をケルビムと輪を描いて回る炎の剣をもって、神は完全にその「道」を閉ざされた。

ケルビムとは、神の王座を担う者として、また幕屋や神殿においては聖所と至聖所の間を区切り、また贖いのふたの上に居られる守護者である。それは神のところに人が超えてくることが出来無いようにと、権力が与えられている者とも言える。

また輪を描いて回る炎の剣とは、神の怒りと裁きを現している。

これらつまり、人は永遠に生きることを完全にあきらめなくてはならなくなった。ということである。

そしてその命に通じる「道」はまったく失ってしまったのである。

それゆえ人は、今日も「人はなぜ生きているのだろうか。」「命とはどこから来るのだろうか。そしてどこ

へいくのだろうか。」などと、人は命の道を完全に見失っているのである。そしてその最後は「死」である。神の完全な主権と裁きがそこに記されている。

神は聖いお方ゆえに、罪を曖昧にすることは決してできない。また裁きを曲げることも決して出来ない。だから、これらのことどうしても実行しなければならなかったことである。

けれども、このこともまた考えてみれば、実に悲しいことである。

神は人を御自身との豊かな交わりを持つ者として創造され、そこには人への愛が溢れていた関係であった。しかしそれが、今やこれほどまでに神の主権と裁きを実行しなければならなくなったのである。ここにも神の深い悲しみとその涙があるだろう。

しかし神は、人が永遠にあきらめなくてはならなかった命への道を今、イエス様によって開いてくださっている。

ヨハ 14:6 「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」

この素晴らしいイエス様の恵みを心から感謝します。今日もこの恵みの中に生かされて行こう！